

【編集後記】

「ご隠居様」の過ごし方——江戸の元・殿様は忙しい？

皇帝ネロの家庭教師をつとめたローマ帝国の哲学者セネカの著『生の短さについて』の有名な冒頭部、「われわれが享ける生が短いのではなく、われわれ自身が生を短くする」。彼は、「自分自身と向き合うこと」こそが生きることであり、それを避け、多くのことに忙殺された生活を送ることは、自らの時間の無駄使いであるとし、自分の本当の時間を取り戻すことを繰り返し説いている。

ドイツの諺（ことわざ）に、「暇がたっぷりある人は何もしない」というのがあるらしい。まさに勤勉なドイツ人らしいが、私などドキッと耳に痛い。

評論家加藤秀俊氏の「隠居のつとめ——江戸の殿様は、いかに文化的余生をすごしたか」という興味深い文章（大阪ガス・エネルギー・文化研究所「CEL」2013）を目にする機会があり、歴史に名を遺した大名たちが、家督を後継者に譲り、藩政の第一線を退きたいいわゆる隠居後に成した文化的・知的な業績の多彩さ、大きさの一端を知り、驚いた。時代劇でもおなじみの水戸黄門様（徳川光圀）はじめ、2、3のエピソードを紹介させていただきたい。

映画やTVドラマの人気シリーズ『水戸黄門』は、幕末、光圀の伝記本や十返舎一九の『東海道中膝栗毛』などを参考に、講談師（名は不詳）が創作した『水戸黄門漫遊記』によるもので、助さん、格さんをお供に、黄門様が各地を漫遊する勧善懲悪の世直し旅。クライマックスでは、徳川氏の家紋「三つ葉葵」の印籠を掲げ、「この紋所が目に入らぬか！」というお決まりの筋立で大団円となる。

しかし、騎馬姿も颯爽とした実際の水戸藩主、徳川光圀は漫遊はしていない。64歳で家督を甥の綱条に譲った隠居後は、領内の文化財保護や大著『大日本史』の編纂にかかるなど、学究に邁進、幕末の水戸学の基盤をつくった。

（やはり、TVでの「暴れん坊」というイメージが強い紀伊徳川家第五代藩主、第八代将軍徳川吉宗も、知的好奇心に富み、様々な分野の書物を読み、数字や経済にも通じていた。彼は洋書の輸入を解禁し、それにより長崎における蘭学ブームがおこったという。）

ドラマ『水戸黄門』では、悪役の役どころの柳沢吉保も、和歌や画才に秀でた文化人であり、荻生徂徠らの儒学者を擁護するなど、学問を奨励した。彼は、第五代将軍綱吉に重用された側用人で、大老格として幕府をリードした。現在の東京都本駒込の2万7000坪の土地に、丘や池など起伏に富んだ壮大な回遊式築山泉水庭園「六義園」を自ら設計し、7年の歳月をかけて完成させた（命名は『古今和歌集』に依拠するもので、紀州和歌浦などの美しい歌枕の風景を再現）。綱吉の六義園への御成りは、少なくとも58回に及んだという。

綱吉薨去後、隠居を申し出、自らの隠居所を庭園の傍につくり、造営を続けた。柳沢家は、代々この庭園を管理したが、明治初めに三井財閥創始者、岩崎弥太郎が購入、その後、昭和13年に東京市（当時）に寄贈され、現在も特別史跡として公開されている。

江戸三大改革の一つ、「寛政の改革」で知られる松平定信。徳川吉宗の孫で、秀才の誉れ高く、奥州白河藩主として、財政立直しなどの功績をあげた。その後、幕府に登用され、老中となり、改革に辣腕を振るったが、余りにも厳しい規制や倹約は、「白河の清きに魚も住みかねて、もとの濁りの田沼（意次）恋しき」と当時の狂歌にも詠まれる不人気で、その後、「尊号一件」と呼ばれる天皇と称号に関する事件で失脚、白河に帰藩した。

55歳で隠居した定信は、心機一転、自らを「楽翁」と号し、総合文化プロデューサーのような活躍であった。

例えば、代々伝わる舞楽を復興、自らも舞った。絵画では、白河藩お抱え絵師であった谷文晁ら多くの画家に絵巻物などを描かせた。植物図鑑をつくり、医学や薬学、保健衛生の書物を編纂した。楽翁の名の通り、自身も和歌、俳句、随筆、茶道、戯作文学まで著わす趣味人で、戯作などの大衆文芸へのアプローチは、江戸前期までの武士と庶民という階級制度をやぶるものでもあった。

(余談だが、長州藩第11代藩主、毛利斉元も、粋なセンスをもつ戯作好みであった。藩の養子縁組に翻弄され、忍従も余儀なくされたが、鹿都部真顔(江戸数寄屋橋で汁粉屋を営む狂歌師・戯作者で、門人3000人ともいわれる)に師事し、土筆亭和気有(つくしていわけあり)などの俳名で、俗謡を詠んでいる。ちなみに、戯作者山東京伝の娘が側室という。)

彼らの第二の人生における並外れた活動、業績は、一朝一夕に出来ることではない。共通していることは、隠居後、突然、思いつきで始めたのではなく、若い頃からの付け焼刃でない蓄積された文化的素養が備わっていて、その確固とした土台をもとに、隠居した名君のつとめとして、文化的貢献がなされたといえる。冒頭のセネカの「自分の本当の時間を取り戻した」元・殿様たちの「ノブレス・オブリージュ」(高貴なるもの、財産・権力・社会的地位の保有には、義務を伴う)の体現であろう。

(谷 奈々)

21世紀 WAKAYAMA

Wakayama Institute for Social and Economic Development

VOL.101

発行 2022年8月8日
編集発行者 一般財団法人 和歌山社会経済研究所
〒640-8033 和歌山市本町2丁目1番地
フォルテワジマ6階
TEL 073-432-1444 (代)
FAX 073-424-5350
URL : <http://www.wsk.or.jp/>
印刷 白光印刷株式会社

無断転載・複写を禁ずる

裏表紙の写真は、当研究所 OB 萬羽昭夫氏撮影